

配布版

Relational Value

違ったまま、 つながる

自然と人をつなぐ関係設計

野口浩二 著

Boundary Object



配布版について

本書は、書籍『違ったまま、つながる 自然と人をつなぐ関係設計』のPDF配布版です。保全に関わる学生や若い世代の方々に役立てていただき、現場での実践や研究が進むことを願い、無償で公開しています。

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

Kindle版

<https://www.amazon.co.jp/dp/B0HKMHF6FN>

本書に関するお問い合わせ先

電子メール info@interight.co.jp

© 2026 Koji Noguchi / 日本インテライツ株式会社

第1版（PDF配布版）2026年9月23日

免責事項および本書の前提

本書の内容は、著者がこれまでの活動を通じて見聞きし、考察した内容に基づいています。記述の正確性には十分配慮しておりますが、事実関係に誤りがあればご指摘いただけますと幸いです。

本書に記載されている見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。

また、本書で示した考え方や手法は、すべての状況において同様の結果を保証するものではありません。実際の活用にあたっては、それぞれの状況に応じて判断してください。

本書は、特定の正解を提示するものではなく、関係の捉え方や働きかけ方の一つの視点を示すものです。

はじめに

本書の出発点は、「異なる価値観を持つ人たちは、一緒に同じ自然を守ることができるのだろうか。」という、活動を通じてしばしば出会う問いです。

普通に考えると、この問いへの答えを探するとき、「対話を増やす」「相互理解を深める」「共通の目標をつくる」といった方向へ進みそうです。つまり、違いを小さくすることで、一緒にできるようにするという発想です。

ところが、この問いについて調べるなかで「Boundary Object（境界対象）」という考え方に出会い、少し違う可能性が見えてきました。

価値観を同じにしなくてもよいのではないか。

さらに一歩進むと、そもそも「一緒に自然を守る」必要さえないのかもしれない。

自然を守りたい人は、守るために活動する。地域の安全を守りたい人は、安全のために活動する。農業を続けたい人は、農業のために活動する。それぞれの目的は違います。それでも、同じ自然、同じ生き物、同じ地図、同じ調査結果などを介して、活動の一部がつながることがあります。

私は鳥取県南部町で、生物多様性の保全と体験などへの利活用を続けてきました。その実践のなかから、自然に関わる人たちの価値観の違いに着目し、自然と人、人と人との関係に働きかける「自然と人をつなぐ関係設計」という考え方をまとめました。

本書では、私たちの実践から生まれた「自然と人をつなぐ関係設計」と、問いを調べるなかで出会った「Boundary Object」という研究を手がかりに、価値観を同じにすることとは違う、人と人がつながる可能性について考えていきます。

目次

免責事項および本書の前提-----	3
はじめに-----	4
目次-----	6
第1章 同じ自然をめぐる二人-----	8
1-1 同じ川を見ている二人-----	8
1-2 自然は同じでも、見えている価値は違う-----	9
1-3 自然と人の「関係」を見る-----	10
1-4 自然と人をつなぐ関係設計-----	11
1-5 もう一度、二人の関係を見る-----	12
第2章 違ったまま、つながる-----	14
2-1 違いをなくさずに、関係を変えられるのか-----	14
2-2 博物館に集まった、違う人たち-----	15
2-3 同じ意味でなくても、活動はつながる-----	16
2-4 「活動」とは何か-----	17
2-5 最初の二人に戻ってみる-----	18
第3章 Boundary Objectとは何か-----	20
3-1 異なる世界のあいだにあるもの-----	20
3-2 柔らかく、同時に形を持っている-----	21
3-3 Boundary Objectにはいくつかの形がある-----	22

3-4	何でもBoundary Objectになるわけではない-----	23
3-5	「何であるか」ではなく、「何をしているか」-----	24
第4章	違ったまま、つながることはできるのか-----	25
4-1	「自然を再生する」とはどういうことか-----	25
4-2	一つの報告書が活動をつなぐ-----	28
4-3	同じ指標を使えば、つながるのか-----	30
4-4	何も共有しなくてよいわけではない-----	31
第5章	自然を介して「関係」を変える-----	33
5-1	最初の二人に戻る-----	33
5-2	二人の「価値観」ではなく「活動」を見る-----	34
5-3	活動がつながると、関係が変わる-----	35
5-4	対立する関係に何ができるか-----	36
5-5	「関係を良くする」とは何だろう-----	37
5-6	活動がつながれば、それでよいのか-----	38
5-7	違ったまま、つながる-----	39
コラム	レッドデータリストはBoundary Objectなのか？---	40
	おわりに-----	45
	参考文献-----	48
	本書について-----	50
	著者プロフィール-----	53

第1章

同じ自然をめぐる二人

1-1 同じ川を見ている二人

一つの川をめぐるって、二人の人がいるとします。

その川には希少な生き物が生息していて、地域の人たちによる保全活動が行われています。一方、この地域では大雨による災害を防ぐため、川の護岸工事が検討されています。

生き物の保全活動をしている人にとって、この川は希少な生き物を守る大切な場所です。河川を管理する人にとっては、地域の人たちの安全を守るために、適切に管理しなければならない場所です。

二人が見ている川は同じです。しかし、その川との関わり方は違います。一人は生き物を守ろうとし、もう一人は地域の安全を守ろうとしています。

どちらかが間違っているわけではありません。しかし、同じ川に異なる目的で関わることで、二人の意見が対立することがあります。

なぜ、同じ自然を見ているのに、このような違いが生まれるのでしょうか。

実際の現場で起きる対立の原因は、価値観の違いだけではありません。経済的な利害、法律や制度、権限、土地所有、負担の違いなど、さまざまな要因があります。本書では、その中でも、同じ自然に関わる人たちの目的や価値の違いに焦点を当てて考えていきます。

1-2 自然は同じでも、見えている価値は違う

私は鳥取県南部町で、生物多様性の保全と体験などへの利活用を続けてきました。その活動の一つに、使われなくなった田んぼに再び水を張り、田んぼとして管理しながら生き物が暮らせる環境をつくる「田んぼビオトープ」があります。

活動を始めた頃、私は、自然が豊かになれば、私たちの暮らしも豊かになるのではないかと考えていました。

しかし、実際に活動を続けてみると、それほど単純ではありませんでした。

同じ自然を見ても、見る人によって価値が異なります。

その違いは、それぞれの人が自然とどのように関わっているかによって生まれているのではないかと。活動を続けるなかで、私はそう考えるようになりました。

1-3 自然と人の「関係」を見る

そこで私たちは、自然そのものだけでなく、自然と人とのあいだにある「関係」を見るようになりました。

例えば田んぼであれば、農家は「生産する」、研究者は「調査する」、子どもは「体験する」、学校は「学ぶ」、保全する人は「守る」というように、人によって自然との関係が異なります。これを簡単に表すと、

自然 — 関係 — 人

となります。さらに活動が続けていると、この関係は固定されたものではないことにも気づきました。それまで田んぼと関わりのなかった人が自然観察会に参加すれば、「見る」「知る」という関係が生まれます。

自然そのものを変えるだけでなく、自然と人との関係も変えることができる。この考えから生まれたのが、「自然と人をつなぐ関係設計」です。

1-4 自然と人をつなぐ関係設計

私たちが行っている保全活動には、大きく二つの働きがあります。一つは、水を張る、草を刈る、侵略的外来種を除去するといった、自然そのものに働きかけることです。もう一つは、自然観察会を開く、研究者とつなぐ、学校が利用できるようにするといった、自然と人との関係に働きかけることです。

実際の活動では、この二つは混じり合っています。私たちは、その中から自然と人との関係に働きかける役割を取り出し、「自然と人をつなぐ関係設計」と呼ぶことにしました。【1】

【2】

自然と人をつなぐ関係設計は、自然に関わる人を観察し、自然と人、人と人のあいだにある関係に働きかける保全の方法です。

その実践を、「①関係を見つける」「②関係を育む」「③関係を評価する」という三つに整理しています。

まず、その場所に誰が関わり、自然とどのような関係を持っているのかを見つめます。次に、新しい関わり方をつくったり、すでにある関係を深めたりします。そして、生物多様性の状態だけでなく、自然と人との関係がどのように変化したのかを見ていきます。

1-5 もう一度、二人の関係を見る

ここで、最初の川の例に戻ってみます。

保全活動をする人と、河川を管理する人がいます。二人と川との関係を見ると、「保全する人と川」「河川を管理する人と川」という二つの関係があります。

しかし、この場所にはもう一つ、「保全する人と河川を管理する人」という、人と人との関係があります。

つまり、一つの自然に二人の人が関わる時、そこには三つの関係があります。

- ① 人Aと自然との関係
- ② 人Bと自然との関係
- ③ 人Aと人Bとの関係

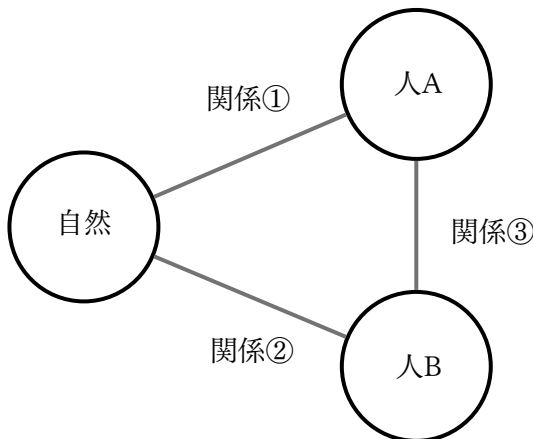


図1-1 三つの関係

自然に対する価値観や目的の違いによって、③の人と人との関係が対立することがあります。

もちろん、自然をめぐる対立の原因は、価値観や目的の違いだけではなく、経済的な利害、法律や制度、権限、土地所有、負担の違いなど、さまざまな要因があります。本書では、その中でも、同じ自然に関わる人たちの目的や価値の違いに焦点を当てて考えていきます。

では、関係設計が自然と人、人と人との関係に働きかける方法であるなら、この③の関係にも何かできるのでしょうか。

話し合いを増やす。お互いを理解する。共通の目標を見つける。そうすることで、二人の違いを小さくしていく方法もあるでしょう。

しかし、それとは別の方法はないのでしょうか。

価値観や目的の違いを残したまま、この二人の関係に新しい関わり方をつくることはできないのでしょうか。

この問いについて考えていくことが、本書の出発点です。

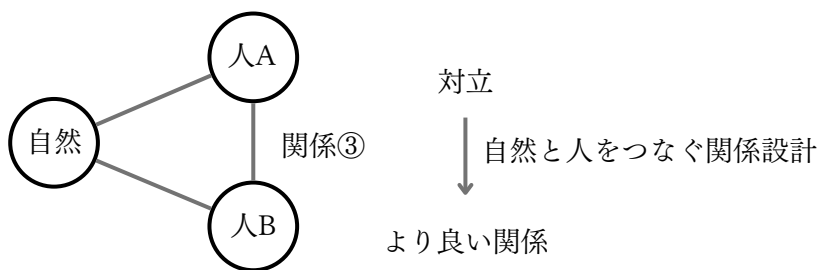


図1-2 関係設計が目指す変化

第2章

違ったまま、つながる

2-1 違いをなくさずに、関係を変えられるのか

前章では、一つの自然に異なる立場の人が関わることで、人と人とのあいだに対立が生まれる場合があることを見てきました。

では、その関係に働きかけるために、何ができるのでしょうか？

最初に思いつくのは、話し合うことです。お互いの考えを知る。相手の立場を理解する。共通する目標を見つける。そうすることで、少しずつ違いを小さくしていくことができるかもしれません。

もちろん、それは大切な方法です。しかし、私はもう一つの可能性が気になりました。

違いを小さくしなくても、関係を変えることはできないのだろうか。

自然を守りたい人は、自然を守りたいままでよい。地域の安全を守りたい人は、安全を守りたいままでよい。農業を続けた人は、農業を続けたままでよい。それぞれが違う目的を持ったままでも、何か一緒にできることがあるのではないか。

この問いについて調べていくなかで出会ったのが、Boundary Object（境界対象）という考え方でした。

2-2 博物館に集まった、違う人たち

Boundary Objectという概念が広く知られるきっかけとなったのは、スーザン・リー・スターとジェームズ・グリーゼマーが1989年に発表した論文です。【3】

二人が研究したのは、アメリカのカリフォルニア大学バークレー校にある脊椎動物学博物館でした。博物館には、研究者、標本を集める人、アマチュアの自然愛好家、博物館を運営する人など、さまざまな立場の人が関わっていました。

興味深いのは、これらの人たちが必ずしも同じ目的で活動していたわけではないことです。

例えば、一つの動物の標本があるとします。標本を集める人にとっては、自分が採集したものかもしれません。研究者にとっては研究のための資料です。博物館にとっては、整理し、保存するコレクションの一部です。

同じ標本でも、人によって意味が違います。

それでも、その標本を集め、記録し、整理し、保存し、研究するという、それぞれの活動はつながっていました。

ここに、私が探していたものに近い考え方がありました。

2-3 同じ意味でなくても、活動はつながる

私は当初、人と人との関係を変えるためには、何らかの共通理解が必要なのではないかと考えていました。しかし、Boundary Objectの考え方は、少し違う方向を示していました。

大切なのは、すべての人が同じ意味を持つことではありません。同じ対象を、それぞれが自分の立場から利用しながら活動することができます。そして、その対象を介して、それまで別々だった活動がつながることがあります。

博物館の標本で考えてみます。採集する人と研究する人が、標本についてまったく同じ価値観を持つ必要はありません。

しかし

採集する → 記録する → 保存する → 研究する

という活動は、一つの標本を介してつながることができます。

ここで重要なのは、「同じ考えになること」と「活動がつながること」は、同じではないということです。

価値観を同じにしなくても、活動はつながる。

これは、私にとって少し意外な考え方でした。

2-4 「活動」とは何か

ここで、本書で使う「活動」という言葉について整理しておきます。Boundary Objectの研究では、workという言葉が使われます。ここでいうworkは、職業として行う有償の仕事だけを意味するものではありません。調査する、記録する、管理する、保全するといった、それぞれの立場で行われる実践を広く含んでいます。

そのため本書では、Boundary Objectにおけるworkを、自然保全の現場に当てはめて考えやすいように、「活動」と表記します。例えば、調査会社が業務として生き物を調べることも、地域の人が無償で生き物を記録することも、本書では活動として考えます。

ただし、自然との関係すべてを活動と呼ぶわけではありません。景色を美しいと感じることや、その場所に愛着を持つことも、関係設計では大切な自然と人との「関係」です。

Boundary Objectについて考えるときには、実際に行われる活動に注目します。

2-5 最初の二人に戻ってみる

ここで、第1章に登場した二人に戻ってみます。

一人は、川に生息する希少な生き物を守りたい。もう一人は、災害を防ぐために川を適切に管理したい。二人の目的は違い、その違いから対立することもあります。

では、二人の価値観を一致させるのではなく、二人の活動に注目したらどうなるでしょうか。

保全する人は、希少種がどこに生息しているのかを知りたい。河川を管理する人も、工事による影響を検討するためには、希少種がどこに生息しているのかを知る必要があります。

理由は違います。しかし、「希少種の生息状況を調べる」という具体的な活動には、接点があります。

例えば、保全活動をする人が持っている生息情報を提供する。調査会社が現地を調査する。調査結果を地図にする。その情報を、保全活動にも河川管理にも利用する。そうすれば、二人の価値観は違ったままでも、一つの生き物や調査結果を介して、それぞれの活動がつながる可能性があります。

二人が同じ目的を持ったわけではありません。対立そのものがなくなったわけでもありません。それでも、それまで別々だった二人のあいだに、「一緒にできること」が一つ生まれました。

もし、これを人と人との「関係」の変化として見ることがで

もし、これを人と人との「関係」の変化として見るができるなら、関係設計にも新しい可能性が見えてきます。

対立をなくすのではなく、対立する関係の中に「一緒にできること」をつくる。

Boundary Objectは、そのための手がかりになるのでしょうか。次章では、この考え方をもう少し詳しく見ていきます。

第3章

Boundary Objectとは何か

3-1 異なる世界のあいだにあるもの

前章では、博物館の標本を例に、Boundary Objectという考え方を紹介しました。

同じ標本でも、採集する人、研究する人、博物館を運営する人では、その意味や使い方が異なります。それでも、一つの標本を介して、

採集する → 記録する → 保存する → 研究する

という、それぞれの活動がつながっていました。

Boundary Objectという考え方を提案したスターとグリーゼマーは、このように異なる立場の人たちが関わる世界を、それぞれ異なる「社会的世界 (social worlds)」として捉えました。【3】

異なる社会的世界では、同じものが必ずしも同じ意味を持つとは限りません。それでも、異なる人たちが同じ対象を扱い、それぞれの活動を進めることがあります。その境界にあって、異なる人たちの活動をつなぐものが、Boundary Objectです。

ここで大切なのは、Boundary Objectが、人々の違いをなくすものではないということです。それぞれの人が、自分の立場や目的を持ったまま同じ対象を扱うことができます。

違う意味を持ったまま、同じものを扱うことができる。

これがBoundary Objectの大きな特徴です。

3-2 柔らかく、同時に形を持っている

では、なぜ同じものを異なる人たちが使うことができるのでしょうか。

Boundary Objectには、一見すると反対に見える二つの性質があります。一つは、柔軟であることです。同じ対象であっても、それぞれの立場から異なる意味を持たせたり、異なる目的で利用したりすることができます。

もう一つは、それでも同じ対象として共有できることです。意味や使い方が完全に同じでなくても、「同じ標本」「同じ地図」「同じ記録」として扱うことができます。

柔軟すぎて人によってまったく別のものになってしまうと、活動をつなぐことはできません。反対に、意味や使い方を一つに決めてしまえば、異なる立場の人がそれぞれの目的で使うことが難しくなります。

人によって違う意味を持つことができる柔軟さと、それでも同じものとして扱える共通性の2つが重要です。

3-3 Boundary Objectにはいくつかの形がある

スターとグリーゼマーは、Boundary Objectを一つの形に限定せず、いくつかのタイプに整理しました。

例えば、多くの人が必要なものを集めて利用できる収蔵庫やデータベースのようなものがあります。人によって具体的なイメージは少し違っていても、大まかな考え方を共有できる概念や分類もあります。異なる人たちが同じ範囲を指しながら、それぞれ別のことに注目できる地図のようなものもあります。さらに、異なる場所で集めた情報を同じ形で記録する標準化された記録用紙のようなものもあります。

このように、Boundary Objectの形はさまざまです。物であることもあれば、地図、記録、分類、考え方のような場合もあります。

つまり、Boundary Objectかどうかは、「何でできているか」だけでは決まりません。

重要なのは、その対象が異なる人たちのあいだで、どのように使われているかです。

3-4 何でもBoundary Objectになるわけではない

ここまで読むと、人によって意味の違うものなら、何でもBoundary Objectと呼べるように思えるかもしれません。しかし、そうではありません。

スター自身も後の論文で、Boundary Objectという言葉が広く使われるようになるなかで、その概念が安易に使われることに注意を促しています。【4】

例えば、一つの希少種を見て、保全する人は「守りたい生き物」と考え、河川を管理する人は「工事への影響を確認する必要がある生き物」と考えるとします。意味が違うからといって、それだけで、その希少種がBoundary Objectになるわけではありません。

もし二人がそれぞれ別々に希少種を見て、別々に活動しているだけなら、二人の活動はつながっていません。一方で、その希少種の生息状況を調べ、同じ地図に記録し、その情報が保全活動にも河川管理にも使われるようになれば、状況は変わります。一つの対象を介して、それまで別々だった活動がつながり始めるからです。

したがって、Boundary Objectについて考えるときには、「これは、誰と誰の、どのような活動をつないでいるのだろうか」と考える必要があります。

3-5 「何であるか」ではなく、「何をしているか」

ここまでを、本書で使うために三つの視点に整理してみます。
Boundary Objectについて考えるときには、その対象が、

- ① 人によって異なる意味を持つことができる
- ② それでも同じ対象として共有することができる
- ③ その対象を介して、それぞれの活動がつながっている

かどうかを見ます。

特に重要なのは、三つ目です。

例えば、希少種、地図、調査結果、レッドデータリストなどが、それ自体でBoundary Objectなのではありません。それらが異なる人たちの活動のなかで使われ、活動をつなぐ働きをしたときに、Boundary Objectとして機能していると考えられます。

つまり、Boundary Objectを考えるときに大切なのは、「それが何であるか」だけでなく、「それが何をしているか」を見ることです。

では、本当にこのようなことが自然保全の現場で起きているのでしょうか。

次章では、実際の研究事例を見ながら、異なる立場の人たちの活動がBoundary Objectを介してどのようにつながっているのかを確かめていきます。

第4章

違ったまま、つながることはできるのか

第3章では、Boundary Objectについて考えるために、三つの視点を整理しました。

- ① 人によって異なる意味を持つことができる
- ② それでも同じ対象として共有することができる
- ③ その対象を介して、それぞれの活動がつながっている

では、このようなことは実際の自然保全の現場でも起きているのでしょうか。

ここでは、自然保全や森林管理などを対象にBoundary Objectの視点から分析した三つの研究を見ていきます。

4-1 「自然を再生する」とはどういうことか

一つ目は、ノルウェーのドブレ山地で行われた大規模な自然再生事業です。【5】

この地域には、かつて軍の演習場として使われていた広大な土地がありました。1999年、ノルウェー議会は軍事利用を終了し、この土地を自然に戻していくことを決定しました。

その後、建物や道路の撤去、汚染への対応、不発弾の処理、植生や生態系の再生など、大規模な事業が進められました。そこには行政、研究者、工事を行う人、農業関係者、観光関係者、地域住民など、さまざまな人たちが関わっていました。

一見すると、「自然を再生する」という共通の目標に向かって進む事業のように見えます。しかし、何をもって「自然が再生された」と考えるのかについては、立場によって違いがありました。

できるだけ人の影響を取り除き、原生的な自然に近づけたいと考える人がいます。一方で、この地域は長いあいだ放牧や地域の暮らしにも利用されてきました。人が利用してきた景観も、この地域の自然の一部だと考える人もいます。

その違いがよく表れたのが、道路をどうするかという問題でした。自然再生の立場からは道路を撤去することが望ましいと考えられましたが、地域の人たちにとっては、観光や放牧、地域へのアクセスのために道路を残す意味がありました。

つまり、「自然を再生する」という大きな方向は共有されていても、どのような自然を目指すのか、その自然を将来どのように利用するのかについては、考え方が異なっていたのです。

この事例を研究したAasetreらは、「生態系再生」という考え方や事業そのものがBoundary Objectとして機能したと捉えています。

関係する人たちは、「生態系再生」についてまったく同じ考えを持っていたわけではありません。それでも、一つの再生事業に関わり、それぞれの立場から活動することができました。

この事例から見えてくるのは、Boundary Objectが、人々の違いをなくすことで活動をつなぐものではないということです。共通する部分を持ちながら、その周りには異なる考え方が残っています。

4-2 一つの報告書が活動をつなぐ

二つ目は、アメリカ・コロラド州の森林管理に関する事例です。【6】

森林をどのように管理し、再生していくかを考えるためには、研究によって得られた知識が必要です。しかし、研究者がつくった知識が、そのまま森林管理の現場で使えるとは限りません。

研究者は、森林の状態や変化を科学的に明らかにしようとしています。一方、森林管理を行う人たちは、その知識を実際の計画や事業に使わなければなりません。両者は同じ森林に関わっていても、行っている活動や必要としている情報が異なります。

この事例では、研究者と森林管理者が協力し、森林再生の計画や実施に利用するための科学的な知識を整理した報告書・枠組みがつくられました。それが「GTR-373」です。

研究者にとっては、研究によって得られた知識を整理したものです。森林管理者にとっては、実際の計画や事業を考えるための手がかりになります。

同じ報告書を、それぞれが異なる立場から利用しています。この研究では、GTR-373をつくり、利用していく過程を通じて、研究者と森林管理者のあいだで継続的な知識交換が行われ、情報への信頼や、組織を越えて森林管理を考えるための共通の土台が生まれたことが報告されています。【5】

ここでは、
研究する → 知識を整理する → 森林管理を計画する → 事業
を実施する

という異なる活動が、一つの報告書や枠組みを介してつなが
っています。

ドブレ山地の事例では、「生態系再生」という考え方や事業が
Boundary Objectとして捉えられていました。それに対して、こ
の事例では、一つの報告書や枠組みがその役割を果たしていま
す。

Boundary Objectは、自然そのものである必要はありません。
異なる人たちがそれぞれの活動のなかで利用でき、その活動をつ
なぐものであれば、さまざまな形をとることができます。

4-3 同じ指標を使えば、つながるのか

三つ目は、生態学的な指標をBoundary Objectとして考えた研究です。【7】

自然の状態を把握したり、管理の方針を考えたりするとき、さまざまな指標が使われます。研究者、行政、自然を管理する人たちが同じ指標を利用することができれば、それぞれの活動をつなぐ共通の道具になりそうです。

しかし、Turnhoutは、指標を共有すれば自動的にBoundary Objectとして機能するわけではないことを示しています。

同じ指標であっても、研究者は自然の状態を科学的に把握するために利用するかもしれません。行政は政策を判断するために利用し、現場で自然を管理する人は具体的な管理方法を考えるために利用するかもしれません。

こうした違いを持ちながら同じ指標を使えることは、Boundary Objectの特徴に合っています。しかし、その指標が実際にどのように解釈され、利用されるかは、人々が持っている価値観や考え方、その場の状況などにも影響されます。

つまり、同じ指標を共有しただけでは十分ではありません。重要なのは、その指標が、異なる人たちの活動のなかで実際にどのように使われているかです。

4-4 何も共有しなくてよいわけではない

三つの事例を見てみると、Boundary Objectの形はそれぞれ違います。

ドブレ山地では「生態系再生」という考え方や事業、コロラド州では森林管理のための報告書や枠組み、生態学的指標の研究では自然の状態を表す指標が取り上げられていました。

それでも、共通することがあります。そこには異なる立場の人たちがいて、目的や考え方は完全には一致していません。それぞれが同じ対象を自分の立場から利用し、その対象を介して、それまで別々だった活動に接点が生まれています。

私はBoundary Objectについて調べ始めたとき、「価値観を同じにしなくてもよい」というところに強くひかれました。

しかし、三つの事例を見ていくと、ここには少し注意が必要なことが分かります。

「価値観を同じにしなくてもよい」ということは、「何も共有しなくてもよい」ということではありません。

例えばドブレ山地では、「自然を再生する」という大きな方向には共通する部分がありました。その一方で、どのような自然を目指すのか、道路を残すのか、将来どのように利用するのかについては違いがありました。

すべてを共有する必要はない。しかし、活動がつながるための何かは共有されている。

Boundary Objectとは、人々の違いをなくすものではなく、違いと共通する部分を同時に残しながら、活動をつなぐものだと考えることができそうです。

ここまで来ると、第1章で考えた二人の関係も少し違って見えてきます。

希少な生き物を守りたい人と、地域の安全を守りたい河川管理者が、同じ目的を持つ必要はありません。しかし、同じ生き物を調べる、同じ場所を見る、同じ調査結果を利用するといった、活動が重なる部分をつくることはできるかもしれません。

では、そのように活動がつながったとき、二人の「関係」は変わったと言えるのでしょうか。

次章では、Boundary Objectについて調べてきたことを、もう一度「自然と人をつなぐ関係設計」に戻して考えてみます。

第5章

自然を介して「関係」を変える

5-1 最初の二人に戻る

ここまで、Boundary Objectについて調べてきました。ここで、第1章に登場した二人にもう一度戻ってみたいと思います。

一人は、川に生息する希少な生き物を守りたい。もう一人は、災害を防ぐために川を適切に管理したい。二人は同じ川に関わっていますが、その目的は異なります。

関係設計の視点から見ると、ここには三つの関係があります。

- ① 保全する人と川との関係
- ② 河川を管理する人と川との関係
- ③ 保全する人と河川を管理する人との関係

これまでの関係設計では、こうした関係を見つけ、育み、その変化を評価することを考えてきました。

しかし、③の関係が対立している場合、そこにどのように働きかければよいのか。これが、本書の出発点でした。

Boundary Objectについて調べてきたことで、その問いに対する一つの手がかりが見えてきました。

5-2 二人の「価値観」ではなく「活動」を見る

二人の価値観だけを見ると、その違いが目につきます。保全する人は希少種を守りたい。河川を管理する人は地域の安全を守りたい。

では、価値観ではなく、二人が実際に行っている活動を見たらどうでしょうか。

保全する人は、希少種がどこに生息しているのかを調べ、記録します。河川を管理する人も、工事による影響を検討するためには、希少種がどこに生息しているのかを知る必要があります。

目的は違います。しかし、「希少種の生息状況を知る」という部分では、二人の活動に接点があります。

例えば、保全する人が持っている生息情報を共有する。調査会社が現地を調べる。調査結果を地図にする。その情報を、保全活動にも河川管理にも利用する。このとき二人は、「自然を守る」という同じ目的を持ったわけではありません。価値観が同じになったわけでもありません。

5-3 活動がつなぐと、関係が変わる

ここで、関係設計の視点からもう一度見てみます。

最初、二人の関係には「意見が対立する」という関わり方がありました。しかし、希少種の生息状況を調べるという活動を介して、「情報を共有する」「同じ場所を調べる」「相手が集めた情報を利用する」という、新しい関わり方が加わります。

対立がなくなったわけではありません。それでも、二人のあいだには、それまで存在しなかった関わり方が生まれています。

これは、関係設計の視点から見れば、人と人との関係が変化したと捉えることができます。

ここで私は、Boundary Objectと関係設計がつながる可能性に気づきました。

Boundary Objectでは、同じ対象を介して、異なる人たちの活動がどのようにつながるのかを見ます。一方、関係設計では、自然と人、人と人との関係がどのように変化するのかを見ます。

二つを重ねると、活動がつながることで、人と人との関係が変わるという見方ができます。

5-4 対立する関係に何ができるか

この考え方を関係設計に取り入れると、対立する人たちの関係に働きかける方法が少し見えてきます。

まず、相手の価値観を変えようとするのではなく、それぞれが何をしているのかを見ます。何を守ろうとしているのか。何を調べているのか。何を管理しているのか。何を判断しなければならないのか。そのうえで、それぞれの活動のあいだに接点がないかを探します。

接点になるのは、同じ生き物かもしれません。同じ場所かもしれません。地図や調査結果、指標かもしれません。

そして、その対象を介して、一緒にできる活動をつくります。同じ場所を調べる。情報を共有する。同じ地図に記録する。相手が集めた情報を自分の活動に利用する。

関係設計の言葉で表すなら、これも「関係を見つける」「関係を育む」という実践として考えることができます。そして、その結果として、情報交換が始まったのか、一緒に行う活動が生まれたのか、相手の情報を利用するようになったのかといった変化を見ることが、「関係を評価する」ことにつながります。

5-5 「関係を良くする」とは何だろう

ここまで考えてきて、最初の問いの見え方が少し変わってきました。

私は最初、対立する二人の関係を良くするために、何ができるのだろうか。と考えていました。

「関係を良くする」と聞くと、私たちは、相手を理解することや、考え方の違いを小さくすること、共通の目標を持つことを想像します。もちろん、それができることもあります。

しかし、Boundary Objectについて調べてみると、それだけが関係の変化ではないことに気づきます。

価値観は違ったままかもしれません。目指すものも違うかもしれません。意見が対立する部分も残っているかもしれません。それでも、一緒に調べることができる。情報を共有することができる。同じ対象を、それぞれの活動に利用することができる。そうした新しい関わり方を、もともとの関係に加えることはできます。

つまり、対立する関係を、対立しない関係に変えるのではなく、対立する関係の中に、それまでなかった関わり方を加える。

これは、私にとって大きな思考の転換でした。

5-6 活動がつながれば、それでよいのか

ただし、Boundary Objectがあれば、対立が解決するわけではありません。同じものを共有すれば、必ず活動がつながるわけでもありません。

さらに、もう一つ考えておく必要があります。

活動がつながったからといって、その関係が必ずしも望ましいものになったとは限りません。

例えば、地域で保全活動をする人が長い時間をかけて集めた生き物の情報を提供し、それを行政や事業者が利用したとします。活動には接点が生まれています。しかし、一方だけが情報を提供し続けたり、一方だけに大きな負担がかかったりするのであれば、それを単純に「良い関係になった」と評価することはできません。

したがって、「活動がつながったか」ということと、「その結果として生まれた関係が望ましいものか」ということは、分けて考える必要があります。

これは、関係設計にとって重要な点です。

活動の接点が生まれたかを見るだけでなく、その結果として人と人とのあいだにどのような関係が生まれたのか。その関係が、それぞれの人にどのような影響を与えているのか。そこまで見て初めて、「関係を評価する」ことができるのだと思います。

5-7 違ったまま、つながる

ここまで考えてくると、Boundary Objectは、対立を解決するための万能な方法ではないことが分かります。

それでも、この考え方から一つの可能性が見えてきます。
異なる価値観を持つ人たちが一緒に何かをするために、必ずしも価値観そのものを一致させる必要はない。

すべてを共有する必要はありません。一方で、第4章で見たように、何も共有しなくてよいわけでもありません。それぞれの違いを残しながら、活動が重なる小さな部分を見つけ、その部分を介して新しい関わり方をつくる。

私は、これを関係設計の新しい仮説として考えてみたいと思います。

対立をなくすのではなく、対立する関係の中に「一緒にできること」をつくる。

それによって、人と人との関係に、それまでなかった関わり方を加えることができるのではないか。

違ったまま、つながる。

本書のタイトルにしたこの言葉は、Boundary Objectについて調べるなかで見えてきた、関係設計の新しい可能性を表しています。

ただし、これはまだ、私たちの実践によって十分に確かめた方法ではありません。一つの問いについて調べた結果、たどり着いた仮説です

コラム

レッドデータリストは Boundary Objectなのか？

ここまでBoundary Objectについて調べてきて、身近な自然保全の道具についても考えてみたくなりました。

例えば、レッドデータリストです。

レッドデータリストは、絶滅のおそれのある野生生物について、その絶滅リスクを評価し、整理したものです。自然保全に関わっていると、さまざまな場面で目にします。

では、レッドデータリストはBoundary Objectなのでしょうか。第3章で整理した三つの視点から考えてみます。

① 人によって異なる意味を持つことができるか

レッドデータリストは、さまざまな立場の人が利用します。研究者にとっては、生物の絶滅リスクを把握するための情報です。行政にとっては、保全施策を考えるための基礎資料になることがあります。保全活動をする人にとっては、守る必要のある生き物を考える手がかりになります。開発や工事に関わる人にとっては、事業による自然環境への影響を検討する際に確認する情報になることがあります。

同じレッドデータリストを見ていても、利用する目的は同じではありません。

この点では、Boundary Objectの一つ目の特徴に当てはまりそうです。

② 同じ対象として共有できるか

目的は違っていても、利用しているレッドデータリストは同じです。ある生き物がどのカテゴリーに位置づけられているのか、どのような理由で評価されているのか、異なる立場の人たちが同じ情報を参照することができます。

二つ目の特徴にも当てはまりそうです。

では、レッドデータリストはBoundary Objectだと言えるのでしょうか。まだ一つ、大切な条件が残っています

③その対象を介して、活動がつながっているか

例えば、ある川で工事が計画されているとします。レッドデータリストを確認すると、その川に生息する可能性のある希少種が掲載されていました。

河川を管理する人は、工事による影響を検討するため、その生き物の生息状況を知る必要が出てきます。一方、地域で保全活動をしている人は、その生き物について以前から観察し、生息場所を記録しているかもしれません。

そこで、

レッドデータリストを確認する

→ 希少種の生息状況を調べる必要が生まれる

→ 地域の保全活動で蓄積された情報を確認する

→ 現地調査を行う

→ 調査結果を河川管理や保全活動に利用する

という流れが生まれたとします。

ここでは、河川管理、保全活動、現地調査という、それまで別々だった活動に接点が生まれています。このような場合には、レッドデータリストが異なる人たちの活動をつなぐ一つのきっかけとして機能していると考えられます。

レッドデータリストだからBoundary Objectなのではない

一方で、研究者、行政、保全活動をする人が、それぞれレッドデータリストを見ているだけならどうでしょうか。同じものを利用していても、それぞれの活動がまったく別々に行われているのであれば、Boundary Objectとして活動をつないでいるとは言いにくいでしょう。

つまり、レッドデータリストだからBoundary Objectなのではありません。

異なる立場の人たちが、それぞれの目的で同じレッドデータリストを利用し、その利用を通じて活動に接点が生まれたとき、Boundary Objectとして機能している可能性が見えてきます。ここでも重要なのは、「レッドデータリストとは何か」ではなく、「レッドデータリストが何をしているか」を見ることです。

Boundary Objectは一つとは限らない

さらに考えてみると、先ほどの例にはBoundary Objectになりうるものが一つだけではありません。レッドデータリストをきっかけにして、希少種そのもの、生息場所を示した地図、地域の人たちが蓄積した観察記録、現地調査の結果なども、異なる

人たちの活動をつなぐものになる可能性があります。

そう考えると、「これはBoundary Objectか？」と対象だけを見て判断するより、「誰と誰の、どの活動が、何を介してつながっているのか？」と考える方が分かりやすそうです。

Boundary Objectは、ものにつける名前というよりも、異なる人たちの活動のあいだで、そのものが果たしている働きを見るための視点として捉えることができます。

おわりに

本書は、一つの問いから始まりました。

異なる価値観を持つ人たちは、一緒に同じ自然を守ることができるのだろうか。

自然に関わる人たちは、それぞれ違うものを大切にしています。生き物を守りたい人がいます。地域の安全を守りたい人がいます。農業を続けたい人がいます。自然を研究したい人もいます。

同じ自然に関わっていても、目的や価値観は同じではありません。その違いから、意見が対立することもあります。

では、どうすれば一緒に自然を守ることができるのでしょうか。

最初は、対話を増やし、相互理解を深め、共通の目標をつくることで、違いを小さくしていくことを考えました。しかし、Boundary Objectについて調べていくうちに、別の可能性が見えてきました。

価値観を同じにしなくてもよいのではないか。

自然を守りたい人は、自然を守るために活動する。地域の安全を守りたい人は、安全のために活動する。農業を続けたい人は、農業のために活動する。目的は違ったままです。

それでも、同じ自然、同じ生き物、同じ地図、同じ調査結果などを介して、それぞれの活動の一部がつながることがあります。そして、活動がつながれば、人と人とのあいだに、それまでなかった関わり方が生まれるかもしれません。

ここまで考えると、最初の問いそのものが少し違って見えてきます。

「どうすれば、価値観の違う人たちが一緒に自然を守ることができるのか」

ではなく、

「そもそも、同じ価値観、同じ目的で、一緒に自然を守らなければならないのだろうか」

という問いです。

もしかすると、同じ目的で自然を守る必要はないのかもしれませんが。それぞれが違う目的を持ち、違う活動を続けながら、その一部をつなぐことができればよいのかもしれません。

違ったまま、つながる。

本書でたどり着いたのは、完成した方法ではありません。Boundary Objectについて調べ、「自然と人をつなぐ関係設計」と重ねて考えることで見えてきた、一つの仮説です。

これから、この考え方を実際の自然保全の現場で試してみたいと思います。価値観の違う人たちが出会ったとき、違いをなくそうとするのではなく、まず、それぞれが自然とどのように関わり、何をしているのかを見てみる。そして、そのあいだに、小さくても活動が重なる場所を探してみる。

そこから、それまでになかった関係が生まれるかもしれません。

違ったまま、つながる関係を、私たちはつくることができるの
だろうか。

この問いを、これからの実践の中で確かめていきたいと思いま
す。

参考文献

【1】野口浩二(2026)「自然と人をつなぐ仕事」日本インタラ
イツ株式会社

【2】野口浩二(2026)「自然と人の関係設計 数式で捉える価
値の現れ方」日本インタライツ株式会社

【3】Star, S. L. & Griesemer, J. R. (1989). “Institutional
Ecology, ‘Translations’ and Boundary Objects: Amateurs and
Professionals in Berkeley’s Museum of Vertebrate Zoology,
1907–39.” *Social Studies of Science*, 19(3), 387–420.

【4】Star, S. L. (2010). “This is Not a Boundary Object:
Reflections on the Origin of a Concept.” *Science, Technology, &
Human Values*, 35(5), 601–617.

【5】Aasetre, J., Hagen, D. & Bye, K. (2022). “Ecosystem
restoration as a boundary object, demonstrated in a large-scale
landscape restoration project in the Dovre Mountains, Norway.”
Ambio, 51, 586–597.

【6】Brown, H. L. C., Cheng, A. S., Clark, N. C., Slack, A. W.
& Wolk, B. H. (2024). “Creating Boundary Objects Supports
Knowledge Co-development Processes: A Case Study Evaluation
from the Colorado Front Range.” *Journal of Forestry*, 122(4),
363–372.

【 7 】 Turnhout, E. (2009). “The effectiveness of boundary objects: the case of ecological indicators.” *Science and Public Policy*, 36(5), 403–412

本書の内容は、著者の見聞および考察に基づくものであり、その正確性および結果を保証するものではありません。本書に記載された見解は著者個人のものであり、特定の自治体、団体、企業、関係機関の公式見解を示すものではありません。本書の内容を利用したことによって生じたいかなる結果についても、著者は責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。

配布版

本PDFは、非営利目的に限り配布いただけます。本PDFの改変・再編集を行った上での再配布はご遠慮ください。営利目的での販売・転載はご遠慮ください。

本書の内容は今後更新される場合があります。修正は主にKindle版に反映されますので、最新の内容はそちらをご確認ください。書籍（紙版）もございますので、内容に関心をお持ちいただけましたらご検討いただけますと幸いです。

違ったまま、つながる

自然と人をつなぐ関係設計

初版 2026年9月23日

著者 野口浩二

発行 日本インタラइट株式会社

ホームページ <https://interight.co.jp/top/>

本書に関するお問い合わせ先

電子メール info@interight.co.jp

© 2026 Koji Noguchi / 日本インタラइट株式会社

著者プロフィール

野口 浩二

一般社団法人里山生物多様性プロジェクト 代表理事。

鳥取県南部町出身。富山大学理学部物理学科卒業、名古屋大学大学院修了（理学修士）。製造業のエンジニアを経て、地元に戻り活動を開始。2020年に法人を設立し、生物多様性の保全と利活用に取り組んでいる

配布版

違ったまま、つながる
自然と人をつなぐ関係設計

日本インタラッツ株式会社

本書は無償配布版です（非営利目的でご自由に共有いただけます）